野わけ

渡辺淳一

野わけ

渡辺淳一

野わけ

一九七四年十月二十五日　初版発行
一九七五年五月二十五日　九版発行

定価七八〇円

著者　渡辺淳一

発行者　陶山巌

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　東京(265)六一一一

印刷所　中央精版印刷株式会社

著者との了解により
検印を廃止します。

乱丁・落丁本はお取替えします。

©1974 Printed in Japan *J. WATANABE* 0093-771083-3041

目

次

帰京　七
たくらみ　五五
まんじ　一三〇
長雨　一四四
夕映え　一七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無言詣　一九六
残り火　二一九
秋冷え　二五二
終章　二八八

装　幀　後藤市三
口絵写真　横田憲治

野

わ

け

帰京

一

有沢迪子が紫野の自宅から新幹線の京都駅に着いたのは、午後七時十分であった。四月も半ばを過ぎ、日はずいぶん長びいたが、七時を過ぎるとさすがに暗く、駅前はすでにネオンが輝きはじめていた。

迪子は駅のホールをまっすぐ左へ抜け、乗降口の手前で到着時刻表を見上げた。

特急下り「ひかり71号」の到着は七時二十三分で、それまではまだ十分の余裕があった。迪子は時間をたしかめると入口に近いガラスの壁に立ち、そこから暮れていく京都の街を見た。

瀟洒な新幹線の駅にくらべ、駅前の建物は貧弱で、駅のスマートさにまだ追いつけないといった感じで、店もネオンも表から見るとずいぶん見劣りする。だが迪子が見ているのは、それらの建物ではなかった。視線はそちらを向いていたが、心はまるで別のところにあった。

十分後に二十メートル先の改札口から阿久津恭造が降りてくる。互いに顔を見合わせ、「やあ」と手をふり、近づいて話しかける。もし彼が空腹であれば食事をして、そのあとホテルへ行く。ホテル

は南禅寺のあたりか、迪子が望めば山科の緑に囲まれた部屋になるかもしれなかった。そこで女中が退るのを待ち兼ねたように、阿久津は迪子の唇を求めてくる。その瞬間まで、あと一時間とかからない。少なくとも一時間後には確実に迪子は阿久津に抱かれている。

いま、二十四歳の、やや小柄な、もの思いにふけっているように見える女性が、一時間後に訪れる男との逢瀬に体を熱くしているとは、ホールを行く誰も知るわけはなかった。

迪子が空想からもどり、改札口を見たとき、時計は七時二十分を示していた。やがてそれを待っていたようにマイクが、やや雑音をまじえながら「ひかり71号」の到着を告げた。

いままでどこに潜んでいたのか、出迎えの人達がぞろぞろと改札口のまわりに集まり、人垣がその先をまるく囲んだ。迪子は出口の右手で、人々のうしろに目立たぬように立っていた。折角出迎えにきたというのに、降りてくる人に、見付かりにくい位置に立っている。

自分から人混みのなかで探している姿を迪子は阿久津に見られたくなかった。できることなら先に彼を見付け、見届けたうえで素知らぬふりを装っているところに阿久津が駈けつけてきて欲しい。これなら阿久津が降りてきたという安心感のうえで、一つの顔をつくることができる。せめて形だけでもそうでなければ、親の目を盗んで迎えにきた迪子の立場はない。

改札口から「ひかり」で降りた乗客が続いてくる。日曜日の夜のせいか家族連れが多い。階段の途中から出迎えの人を見付け、手を握りあっている人もいる。週末の秘かな旅行に行ってきたのか、肩を抱きあって降りてくる二人連れもいる。

駅のホールの明るい照明で改札口のまわりは浮き立っているが、降りてきた人々の顔には一様に疲れがみえる。どの顔にも週末が終った安堵と軽い失望があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

迪子は流れてゆく人々の間に阿久津の姿を追った。改札口を出た列は横に拡がり、それを真横から見ている形の迪子には降りてくる阿久津を見逃す心配があった。初めの願いとは別に、迪子は少しずつ改札口の方へ近づいていった。その辺りなら列はまだ拡がらず、降りてくる人のすべてが見渡せる。

迪子が改札口の手前まで近づいた時、降りた人の流れは、そろそろ終りに近づいていた。まばらになった列を見て、迪子は急に心細くなった。

三日前、京都を発つ時、阿久津は間違いなくこの汽車で帰るといった。もし時刻が変更になれば電話がくるはずであった。明るい日曜日の一日、迪子は万一のことを思って家に居続けた。だが阿久津からの電話はなかった。

迪子は改札口の端から階段の方を見た。列はまだ続いているが、降りてくる人は少ない。若い人もいるが、多くは足の遅い老人や、子供の手をひいた人達であった。旅行鞄一つの阿久津なら、もっとはやく身軽に降りてこられるはずである。

変だわ……

迪子は視線を階段の先からホールへ戻した。一度にどっと降りてきた時、やはり見逃したのかもしれない。迪子は再び元の位置へ戻りかけた。その時、正面からまっすぐ、こちらへ向かってくる男がいた。

グレーの背広を着て、茶色の旅行鞄をもっている。間違いなく阿久津であった。

迪子は近づいてくる男を見て、ほっとしながら、心の片隅で少し怒っていた。逢えたのだから文句はないのだが、その逢い方が少しばかり気にくわなかった。

「ただいま」

阿久津の声は屈託がなかった。
「どこから降りてきたの」
「出口はここしかないだろう」
阿久津はもうほとんど人のいなくなった改札口の方を振り向いた。
「あたし、ちゃんといたのよ」
「知っている」
「じゃあ、どうしてあんな方から来たの」
「国立病院の守屋と一緒だった」
「守屋さんが……」
迪子は慌ててホールから出口の方を見たが、守屋の姿はなかった。
「東京で乗ってひょいと見ると、一つ前の席に守屋が坐っていたんだ。おかげで途中は退屈しなくて済んだが、降りた時、きみと逢うのではないかと気が気でなかった」
「で、守屋さんあたしには気付かなかった?」
「きみが改札の右手の方にいたので、左側からでて、そこで別れた」
阿久津と守屋は西京薬科大学の同期生でともに今年三十五歳だった。二人とも薬剤師の免許をもってはいるが開業せず、阿久津は大学の研究室から輸血センターの検査部長になり、守屋は国立病院の輸血部長であった。二人とも同期生であるうえに、同じ京都の公立の機関に勤めている関係もあって、親しい。今度の車中で一緒になったのも、二日前から東京でおこなわれた輸血学会に出席した帰りであった。

同じ西京薬大を卒え、阿久津の下で検査技師として働いている迪子も、守屋は何度か逢って知っていた。守屋がセンターに迎えにきて、二人並んで飲みに出かけるのを見る時なぞ、迪子は男同士ながら、その親しさに軽い嫉妬を覚えることさえあった。

「ほとんどの方は今日帰ってきたのでしょう。どこへ行くの？」

阿久津は旅行鞄を持ったまま、ホールの出口とは反対の方へ歩きはじめた。

「まだその辺りのタクシー乗場に守屋がいるだろう。一寸用事があるといって別れたのだから逢うとまずい。喫茶店に行ってお茶でも飲んでから行こう」

鞄が重いのか、阿久津は持つ手を右から左に変えた。

「お食事は」

「守屋とビュッフェで食べた。きみはまだだろう」

「家で食べてきたわ」

「家から直接きたのか」

「そうよ、どうして」

「いや……」

阿久津は一瞬口籠ったが、すぐ、

「日曜の夜だから出にくかったんじゃないか」

「宇治のお友達のところに行くといって、きたの」

「宇治……」

「そう、おかしい？」

阿久津は答えず歩き続けた。改札口から五十メートルも行くと、ホールの先に食堂と喫茶店が並んでいた。その喫茶店に二人は向かい合って坐った。夜になっても店は新幹線の時間待ちの客で混んでいた。

「学会はどうでした」

「なかなか盛況だった、いろいろ質問がでてね」

今度の学会で阿久津が発表したのは、「後天的B型血液の一例について」という題であった。

この論文のきっかけになったのは、迪子が結腸癌の患者へ輸血をするために、血液型を調べたのがはじまりであった。その患者は五十五歳の男性で、血液型は以前からA型であった。ところが迪子が調べてみると抗Aとともに抗Bにも凝集を示していた。A型であれば抗Aにしか凝縮しないのだからこれはおかしい。不思議に思った迪子は、今度は血球側からでなく血清側からも調べてみた。するとこちらでは普通のA型の人と同じく抗Bにだけ凝縮した。

迪子はこの奇妙な血液型のことを阿久津に報告した。阿久津は自分で再検査をし、調べなおした結果、これは後天的に血液型が変型したもので、この原因は癌のためではないかと推定した。論文をいろいろ考え、まとめたのは阿久津だが、最初に疑問を投げかけたのは迪子だった。このため発表者は阿久津であったが、共同研究者として迪子の名前ものっていた。

「先天的B型の亜型ではないかという質問があったが、それは家系調査で否定してあるから問題はなかった」

「やっぱり調べておいてよかったわね」

喉が渇いていたのか、阿久津は一気にお冷を飲みこんだ。

「癌との関係についてはどうでした」
「変型が癌によるのだとすれば、癌の早期発見の有力な証拠になると思ったが、例数が少ないから、これだけではなんともいえないという意見が多かった」
「残念ね」
「しかし一例では無理だ。ただ守屋も一例だが、癌の患者で、後天的に血球凝集反応が変わった例を知っている、と発言してくれた」
迪子は運ばれてきたコーヒーを一口飲んで阿久津を見た。小一時間後には阿久津に抱かれることを想像したのからみると、経過はいくらか変わっていた。だがいまの迪子には学会の反響は、愛されることに劣らず関心があった。
「守屋がいうのは直腸癌だったが、他に肺癌患者の血液型を調べた人の話では、そういう変型はなかった、ということだ」
「すると癌の種類によって違う型が現れるというわけですか」
二人だけの時は親しい言葉を使うのが、仕事のことになると自然に敬語になった。
「腸の癌の患者にだけ現れるところから、腸内で発生するバクテリアが関係しているのではないか、という意見も出た、ただ、うちの例もそうだが、守屋の例も、かなり病状がすすんでいる。いわゆる癌の末期だから、どうもこれをすぐ早期発見に応用できるというのは、少し無理かもしれない」
「でも初期の人の場合でも、もう少し広範囲に調べてみれば、変わった型が発見できるかもしれないわ」
「そうかもしれないが、癌の早期の患者はなかなか摑まえにくいからね」

「病院じゃなくて輸血センターだから、そういう研究には一寸条件が悪いわね」
「しかし面白い発表だと、なかなか評判がよかった」
「よかったわ」
「きみのおかげだ」
「そんな……」
迪子はもう一度コーヒーを啜った。
「守屋が、共同研究者の有沢迪子というのは、あのよく働く美しい女性だろうといっていた」
「からかってるの？」
「いや本当だ、あいつ、見ないふりをして結構見ている。もっとも、あいつは俺達のことはなにも知らない、学会で発表をきいた人達の間にも、俺達のことを知っている人はいない」
阿久津は喫いかけの煙草をもみ消して立ち上がった。
「もう大丈夫だ、行こう」
「家の方にはいいの」
阿久津ははっきり答えずレジに向かった。
駅舎の改札口のあたりは相変わらず乗降客であふれていた。小旗をふりそのあとを一団となって続く団体の列がある。それをやりすごしたところで二人は駅を出た。タクシー乗場は二、三十メートルの列であったが、日曜の夜のせいか、空車が次々と待っている。守屋の姿はもうどこにもない。二人は五分も待たずに車に乗った。
「南禅寺」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com